

# 『源氏物語』における「遺言」-- 桐壺院の遺言を中心に

著者	山畑 幸子
雑誌名	清心語文
号	5
ページ	1-13
発行年	2003-08
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000304/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000304/</a>

## 『源氏物語』における「遺言」

### ——桐壺院の遺言を中心に——

山 畑 幸 子

#### 一 はじめに

『源氏物語』において「遺言」に着目すると、遺言を残した人物と遺言を託される人物、加えて、遺言の中で語られる人物との関わりによって、物語が展開されていると言える。それほど遺言は、物語構成上重要なものである<sup>①</sup>。そもそも、物語は、主人公の運命の変転によって展開されるものである。本稿では、正編の主人公である光源氏の運命左右の契機となる桐壺院の遺言に至るまで、及びその遺言自体の構成方法の一端について論を進めることにしたい。

まず、『源氏物語』において、どの人物が遺言を残しているのかを簡単に述べてみたい。

『源氏物語』に見られる遺言は、作中人物の死が描かれたり、会話や心中忖意が描かれたりする場面に多く用いられている。その際、必ず、遺言を残した人物と遺言を託された人物とが設定されている。

遺言を残した人物は、次の一八人が挙げられる。男性では、按察大

納言、明石入道、紫上の祖父、前坊、桐壺院、常陸宮、少弐、朱雀院、柏木、八宮の一〇人である。女性では、桐壺更衣、紫上の尼君、六条御息所、末摘花の乳母、藤壺宮、一条御息所、紫上、大君の八人である。

これらについては、次に挙げる三つの条件のいずれかに当てはまることから、『源氏物語』の遺言であると判断した。

① 『源氏物語』本文に「遺言」と明記されている。

② 『源氏物語』本文には「遺言」と明記されていないが、作中人物が自身の死を自覚もしくは想定した記述がある上で、何らかの意思表示（発言や手紙）がある。

③ 遺言を託された人物や他の人物によって語られる形で、ある作中人物の生前の強い思いが記述されている。

次に、遺言がどの巻に描かれているのかを列挙すると、左のようになる。

【正編】「桐壺」・「若紫」・「葵」・「賢木」・「落標」・「蓬生」・「薄雲」・「玉鬘」・「若菜上」・「柏木」・「夕霧」・「御法」

【続編】「橘姫」・「権本」・「総角」

遺言が描かれる巻数は一五である。当然のことではあるが、遺言が描かれるということは、作中人物が死という形で物語から退場することを意味する。従って、遺言が描かれる巻は、物語が大きな転機を迎えると言える巻とも言えるであろう。

続いて、遺言を託された人物は一七人である。男性では、桐壺院、光源氏、朱雀帝、冷泉帝、左大臣、少貳の男子、夕霧、匂宮、薫の九人である。女性では、桐壺更衣の母君、紫上の尼君、明石御方と明石御方の母、末摘花、侍従、大君、中君の八人である。

## 二 按察大納言の遺言との関わり

「桐壺」巻で、桐壺更衣の没後、父である按察大納言<sup>（注1）</sup>の遺言が、桐壺更衣の母によって桐壺院<sup>（注2）</sup>に、次のように語られる。

生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言いまはとなるまで、  
『ただこの人の宮仕の本意、かならず遂げさせてまつれ。我亡くなりぬとてくちをしよう思ひくづほるな』と、かえすがえすいさめ  
おかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは  
なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言違へじ  
とばかりに出だしたてはべりつるを、（「桐壺」巻・一七頁～一八  
頁）

桐壺更衣の入内は、この遺言によるものであり、しかも、父の大納言

が亡くなってからのことであつたことが分かる。しかし、桐壺更衣の死後に、なぜ按察大納言の遺言を明かさなければならなかったのだろうか。桐壺更衣については、徐々に身辺が明かされるという手法で描かれている。

いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひたまひける中に、  
いとやむごとなききにはあらぬが、すぐれて時めきたまふあり  
けり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましき  
ものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣た  
ちはましてやすからず。（「桐壺」巻・八頁）

「桐壺」巻冒頭のこの記述の時点では、桐壺更衣が女御であるのか更衣であるのか、身分が分からないようになっている。さらに付け加えると、桐壺更衣は「御方」、「御息所」といった呼び方をされ、亡くなるまで身分が明かされないままなのである。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよし  
あるにて、（「桐壺」巻・八頁）

この記述によって、桐壺更衣の出自が明かされ、血筋が良いことが分かる。

内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来てその宣  
命よむなん悲しきことなりける。女御とだに言はせずなりぬるが  
あかずくちをしよう思さるれば、いま一階の位をだにと贈らせたま  
ふなりけり。（「桐壺」巻・一三頁）

桐壺更衣没後の三位追贈の記述であるが、これまで四位の扱いであつ

たこと、更衣という身分であったことが、初めて明かされるのである。こうした記述の後に、按察大納言の遺言が描かれ、桐壺更衣の入内の理由が分かるようになっているのである。按察大納言の遺言は、構成上の役割の一つとして、桐壺更衣の身辺を明かしていく一環であると考えられるのである。

一の皇子は右大臣の女御の御腹にて、寄せおもく、疑ひなき儲君と世にもてかしづきこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。〔桐壺〕巻・九頁

この皇子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にもようせずはこの皇子のたまふべきなめりと、一の皇子の女御は思しうたがへり。〔桐壺〕巻・九頁

この皇子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮にたてまつりしにおとらず、内藏寮・納殿の物を尽くしていみじうせさせたまふ。〔桐壺〕巻・一〇頁

一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほし出でつつ、親しきなど女房、御乳母をつかわしつありさまを聞こしめす。〔桐壺〕巻・一四頁

また、これらの記述から、光源氏は朱雀帝<sup>（注）</sup>よりも桐壺院から溺愛されていることが分かる。こうした状況下にある光源氏が、どのような処遇をされるのか、興味の湧くところである。そこに按察大納言

の遺言が描かれるのである。「遺言」という形をとって、桐壺更衣から光源氏へと物語の中心人物の焦点を移行しているのである。

さらに、桐壺更衣の母から按察大納言の遺言を聞いた桐壺院は、次のように語っている。

「故大納言の遺言あやまたず、宮仕の本意ふかくものしたりしよろこびは、かひあるさまにこそ思ひわたりつれ、言ふかいなしや」とうちのたまはせて、いとあはれにおぼしやる。「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでにもありなむ。寿くところ思ひ念ぜぬ」などのたまはす。〔桐壺〕巻・二〇頁

按察大納言の遺言を桐壺院が聞き、桐壺院が光源氏の処遇を考えなければならぬ物語の流れになっている。つまり、光源氏の処遇の決定は、桐壺院の措置に委ねられているのである。

光源氏の措置については、立坊、親王、臣籍降下の三通りが考えられる。

明くる年の春、坊さだまりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また、世のうけひくまじき事なりければ、なかなかあやふく思しはばかりて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、〔桐壺〕巻・二三頁～二四頁

無品の親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、わが御世もいとさだめなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行く先も頼もしげなめること、と思しさだめて、いよいよ道々の才をならは

させたまふ。きはことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となりたまひなば世の疑ひ負ひたまひぬべくものしたまへば、宿曜のかしこき道の人に勸へさせたまふにも同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しおきてたり。〔桐壺〕  
卷・二五頁

光源氏の立場については、「世のうけひくまじき事」である。更衣腹の光源氏よりも、強力な後見のある女御腹の朱雀帝が春宮に立つべきであると世の中が考えるのは、当然のことであろう。また、後見がないことと、いずれは光源氏が春宮に冊立されるかもしれないという「世の疑ひ」を回避する為に、桐壺院は親王にもしなかつたのである。つまり、光源氏が行動の自由を持つ臣下であることが、これから物語を展開していく上で、どうしても必要な条件であつたのである。

このように考えると、按察大納言の遺言は、光源氏の臣籍降下へと、条件を重ねていく為の周到な用意の一つなのである。また一方で、同時に、父親が帝であるという主人公の高貴さとその帝に溺愛されていること、桐壺院しか光源氏を庇護する人物がいなかったことを強調しているのである。このことを押さえておく為に、物語の始めから、主人公光源氏を臣下として描いていないのであろう。

結果として、按察大納言の遺言は、後の桐壺院の遺言に繋がる一要素なのであり、物語において同一線上に構成されているものと考えられるのである<sup>（注4）</sup>。一つの遺言が次の遺言に関連するという構成がなされているのである。

### 三 桐壺院の物語退場

桐壺院は、「賢木」巻で崩御し、その際に遺言を残している。しかし、遺言を残させるという形で死後も物語に関与させるのであれば、なぜ、物語から退場させなければならなかつたのであろうか。結論から述べると、既に言われていることではあるが<sup>（注5）</sup>、「若紫」巻で予言された光源氏の「違ひ目」を実行していく為である。けれども、併せて、桐壺院の崩御がほかの巻ではなく、「賢木」巻でなければならぬのかもしれない。

源氏の君は、上の常に召しまつはせば、心やすく里住みもえしたまはず、〔桐壺〕卷・三〇頁

内裏には、もとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々まで散らずさぶらはせたまふ。里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なうあらため造らせたまふ。〔桐壺〕卷・三一頁  
光源氏は、皇族の血を引くとは言え、臣籍に降下した人物である。臣下である者をこのような扱いにすることは、異例なことである。桐壺院崩御後の光源氏の不遇とを考え合わせると、いかに光源氏が桐壺院の庇護下にあつたのかということがよく分かる。

「葵」巻の冒頭に、「世の中変りて後」とある。既に桐壺帝は讓位し院となり、弘徽殿、右大臣が後見にある朱雀帝の時代となつたことが分かる。この時点で、光源氏の「違ひ目」に向けての準備が徐々にな

されているのである。そして、「賢木」巻のはじめ頃には、「院の上、おどろおどろしく御悩みにはあらで例ならず時々悩ませたまへば」とあり、桐壺院崩御に向けての伏線が描かれている。

では、「若紫」巻における予言が、どのようなものであったかを見てみたい。

中将の君も、おどろおどろしくさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋のこゝとを合はせけり。「その中に違ひ目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえて、「若紫」巻・一六六頁

「及びなう思しもかけぬ筋」とは、「その中に違ひ目ありて」とあるから、光源氏の身の上に関わること、光源氏の今後の人生における予言であると考えられる。光源氏の運勢の中に「違ひ目」があるというのである。従来そのように解釈されている<sup>注6</sup>。しかし、「その中に」の部分で、光源氏の人生の「その生涯の中頃に」というように解釈できないだろうか。正編最後の「幻」巻で光源氏は五十二歳、「違ひ目」が実現する須磨退居は二十六歳である<sup>注7</sup>。「その生涯の中頃に」と解釈すれば、光源氏の年齢ともびたりと合致するのである。従って、光源氏が二十六歳になる以前に、即ち、「須磨」巻、「明石」巻の前までに桐壺院の崩御を設定しなければならなかったのである。

しかし、桐壺院が崩御したと言つても、光源氏は春宮（後の冷泉帝）の後見でもあり、政治的な失態や何か罪でも犯さない限り、政界から

失脚させることはできないのである。

御位をさらせたまふといふばかりにこそあれ、世の政をしづめさせたまへることも、わが御世の同じことにておはしまいつるを、帝はいと若うおはします、祖父大臣いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世を、いかならむと、上達部、殿上人みな思ひなげく。（「賢木」巻・六六頁）

院のおはしましつる世こそ憚りたまひつれ、後の御心いちはやくて、かたがたおぼしつめたる事どもの報いせむとおぼすべかめり。事にふれてはしたなきことのみ出で来れば、かかるべきことはおぼししかど、見しりたまはぬ世のうさに、立ちたまふべくもおぼされず。（「賢木」巻・六九頁）

いまはいとど一族のみ、かへすがへす栄えたまふこと限りなし。世のおもしろものしたまへる大臣の、かく世をのがれたまへば、おほやけも心ぼそうおぼされ、世の人も心あるかぎりはなげきけり。（「賢木」巻・九六頁）

このように、桐壺院崩御後の弘徽殿太后と右大臣の意の俣の様子が描かれている。「若紫」巻で予言された「違ひ目」の実現には、こうした光源氏にとって不利な情勢を作り出しておく必要があったのである。

「さはれ、しばしこの事漏らしはべらじ。内裏にも奏させたまふな。かくのごと罪はべりとも、おぼし棄つまじきを頼みにて、あまえてはべるなるべし。内々に制しのたまはむに、聞きはべらずは、その罪に、ただみづから当りはべらむ」など、聞えなほしたまへど、こ

とに御けしきもなほらず。(略) このついでにさるべき事ども構へ出でむによき便りなり、とおほしめぐらすべし。〔賢木〕巻・一〇四頁)

その一方で右大臣の六君であり、しかも、朱雀帝に尚侍として仕える臘月夜との逢瀬を、光源氏は右大臣に知られてしまうのである。そして、傍線部にあるように、弘徽殿太后と右大臣は光源氏を政界から遠ざける為の口実を画策しているのである。

桐壺院の遺言が単独で、光源氏の「違ひ目」を実現させているのではない。これらの出来事を絡み合わせながら、光源氏の「違ひ目」の実現へと物語を方向付けているのである。

つまり、桐壺院崩御から光源氏が須磨へ退居する二十六歳までの約二年間<sup>(注)</sup>、徐々に徐々に光源氏を「違ひ目」に導く要素を織り込んで物語を進行させているのである。そして、「若紫」巻における予言の実現と、光源氏の年齢的な設定においても、「賢木」巻で、桐壺院を死という形で物語から退場させる必要があったのである。

#### 四 桐壺院の遺言に至るまで

桐壺院の心理描写においても、「賢木」巻の桐壺院の遺言に繋がる伏線として用意されている。

四月に内裏へ参りたまふ。ほどよりは大きにおよすげたまひて、やうやう起きかえりなどしたまふ。あさましきまでまぎれところ

なき顔つきを、思しよらぬ事にしあれば、また並びなきどちはげに通ひたまへるにこそは、と思しけり。いみじう思しかしづくこと限りなし。源氏の君を限りなきものに思しめしなから、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にもえ据ゑたてまつらずなりにしを、あかずくちをしよう、ただ人にてかたじけなき御ありさま容貌にねびもておはするを御覧するまに、心ぐるしく思しめすを、かうやむごとなきに御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、瑕なき玉と思ほしかしづくに、〔紅葉賀〕巻・二三四頁

この記述は、藤壺宮と桐壺院、正確には光源氏との間の子である後の冷泉帝が誕生した時のものである。「思しよらぬ事にしあれば」とあるので、この皇子が光源氏の子であるとは思っていないことが分かる。そして、これまで光源氏を立坊できなくて残念だと桐壺院が思っていることも分かる。この皇子を立坊させ帝にしたいという思いに繋がっている。この思いは、桐壺院が光源氏の臣籍降下を決定する「桐壺」巻の場面を想起させる。母親が更衣で劣り腹の子であった光源氏に對して、この皇子は「やむごとなき御腹」(藤壺)の子であり、その上、光源氏と「同じ光」(容貌や雰囲気が酷似)であるのだから、桐壺院がこの後の冷泉帝を立坊させたいと考えるのは当然であろう。

#### 五 桐壺院の遺言

桐壺院の遺言は、崩御後も桐壺院を物語に関与させようとするもの



である。桐壺院の遺言は、主人公光源氏の運命左右に関わるもので、朱雀帝に残された引用Aと光源氏に残された引用Bと二つある。

A 院の御悩み、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜しみきこえぬ人なし。内裏にもおぼし嘆きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御ことをかへすがへす聞えさせたまひて、次には大将の御こと、「はべりつる世に變らず、大小のことを隔てず、何ごとも御後見とおぼせ。齡のほどよりは、世をまつりこたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見たまふる。かならず世の中たもつべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をせさせむと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれなる御遺言どもおほかりけれど、女のまねぶべきことにしあらねば、この片はしだにかたはらいたし。〔賢木〕巻・六五頁

B 大将にも、朝廷に仕うまつりたまふ御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことをかへすがへすのたまはす。〔賢木〕巻・六六頁

桐壺院の遺言は、朱雀帝が遺言を実行しなければ、光源氏に残された遺言が実行できないように、二段構えの構造となっている。朱雀帝がこの桐壺院の遺言を実行するか否かによって物語が変化していくのである。仮に、朱雀帝が遺言をすぐに実行していたとすれば、光源氏が須磨に退居するということは無かつたであろう。したがって、「若紫」巻で予言された光源氏の「違ひ目」を物語の展開上実現していく為に

は、朱雀帝に遺言を実行させないという設定が必要であつたのである。引用Aと引用Bとも、光源氏と春宮について遺言しており、桐壺院が意図することは一貫している。春宮が帝位に付き、光源氏が朝廷と春宮の後見として、事実上の為政者となるように、桐壺院の遺言によって方向付けようとしているのである。

引用A傍線部においても、桐壺院の御代と同じように光源氏を後見として扱うように指示している。後見と言っても、公私の区別を付けない「帝」の後見であるから、つまり、光源氏を実質の為政者にせよ、ということであろう。引用A点線部は、「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人」という「桐壺」巻の高麗人の観相を想起させるものである。この遺言の中でも、「桐壺」巻が想起されておき、いかに光源氏の運命に桐壺院が関わっているのかがよく分かる。そして、順接の接続詞「さるによりて」とある。引用A波線部にあるように、光源氏には帝になる相があるので、「わづらわしさに」臣籍降下させ、「朝廷の御後見」をさせようとしたことを朱雀帝に明かしている。さらに、「その心違へさせたまふな」と念を押している。これは、桐壺院が自分亡き後の光源氏の不遇を憂慮して、弘徽殿太后と右大臣側に釘を刺しているものである。

引用Aでは、光源氏の身を案じて立坊を避けたことが明かされ、「朝廷の御後見」という光源氏の処遇について語られている。しかし、具体的にどのような官職や地位にせよ、ということまでは指示されていないのである。このことにも、注目すべきである。作者は、この遺言



に様々な含みを持たせ、巧妙に読者の関心を引き付けておく為に、故意に曖昧にしているのである。「朝廷の御後見」として限定しておきながら、同時に、主人公光源氏の将来に選択肢を残しているのである。

## 六 朱雀帝への遺言と亡霊

光源氏の須磨退居は、既に「若紫」巻で宿世として予言されていることであるが、光源氏は自主退居を決意する際に次のように語っている。

「かく思ひかけぬ罪に当りはべるも、思うたまへあはすることのいふしになむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身は亡きにしても、宮の御世だに事なくおはしますさば」とのみ聞えたまふぞことわりなるや。（「須磨」巻・一二五頁）

光源氏は春宮の身を案じて、須磨へ自主退居を決めたことが分かる。春宮は光源氏の実子であるから、春宮の身を守るのは当然であろうと考えられるが、光源氏は、引用Bの「この宮の御後見」という桐壺院の遺言を守った形になっているのである。光源氏は遺言を守り、朱雀帝は遺言を守ることができない、という相反する形で光源氏の「違ひ目」が実現しているのである。

朱雀帝が桐壺院の遺言を実行するまでには、朱雀帝の心情の動きが大きく関わっている。

帝は、院の御遺言たがへずあはれにおぼしたれど、若うおはし

ますうちに、御心なよびたる方に過ぎて、強きところおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず、世の政御心にはなぬやうなり。（「賢木」巻・七一頁）

左の大臣も、公私ひきかへたる世のありさまに、ものうくおぼして、ながき世の固めと聞えおきたまひし御遺言をおぼしめすに、棄てがたきものに思ひきこえたまへるに、かひなきこととたびたび用ゑさせたまはねど、せめてかへさひ申したまひて籠りゐたまへぬ。いまはいとど一族のみ、かへすがへす栄えたまふこと限りなし。世のおもしろものしたまへる大臣の、かく世をのがれたまへば、おほやけも心ほそうおぼされ、世の人も心あるかぎりはなげきけり。（「賢木」巻・九六頁）

「院のおぼしのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませたまふに、え念じたまはず。（「須磨」巻・一三八頁）

桐壺院の崩御後、朱雀帝は、遺言が実行できていないことに拘っている。そして、光源氏の須磨退居後には、「罪得らむかし」と思うまでになつており、常に桐壺院の遺言に忠実であろうとする内面とは裏腹に実行することができなかった。その障害となつているのが、弘徽殿太后と右大臣の存在なのである。このような状況の中、光源氏が須磨に退居して一年後、桐壺院は亡霊となつて光源氏の夢に出現するのである。天変地異のさなか、光源氏が窮地の極限に達した時である。そして、桐壺院の亡霊は、「かかるついでに内裏に奏すべきことあるにより

なむ急ぎ上りぬる」〔明石〕卷・一六〇頁）と語って、朱雀帝の夢にも出現するのである。

その年、朝廷に物のさとししきりて、もの騒がしきことおほかり。三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御けしきいとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞えさせたまふことどもおほかり。源氏の御ことなりけんかし。いとおそろしういとほしとおぼして、〔明石〕卷・一七六頁）

朱雀帝に対する、桐壺院の亡霊の具体的な発言内容は記述されていないが、桐壺院の亡霊が朱雀帝を睨んでいることと、「源氏の御ことなりけんかし」という記述から、遺言に反して光源氏を朝廷から遠ざけたことを怒って、亡霊となつて出現したことが分かる。一方の朱雀帝は、桐壺院の亡霊を恐れている。桐壺院の亡霊を物語に再登場させることで、遺言に背いているという後ろめたい心理状態にある朱雀帝に、さらに追い打ちを掛けているのである。

睨みたまひしに見あはせたまふと見しけにや、御目にわづらひたまひてたへ難う悩みたまふ。御つつしみ、内裏にも宮にも限りなくさせたまふ。

太政大臣亡せたまひぬ。ことわりの御齡なれど、次々におのづから騒がしき事あるに、大宮もそこはかとなうわづらひたまひて、ほど経れば弱りたまふやふなる、内裏におぼし嘆くことさまざまなり。〔なほこの源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むなら

ば、かならずこの報いありなとなむおぼえはべる。いまはなほもとの位をも賜ひてむ」とたびたびおぼしたまふを、（略）后かく諫めたまふにおぼし憚るほどに月日重なりて、御悩みどもさまざまに重りまさらせたまふ。〔明石〕卷・一七七頁）

傍線部の記述に見られるように、桐壺院が亡霊となつて出現してからは、朱雀帝の身邊では不幸な出来事が起き続けているのである。

年かはりぬ。内裏に御薬のことありて、世の中さまざまにのしる。（略）つひに後の御諫をも背きて、赦されたまふべき定め出で来ぬ。去年より後の御物の怪悩みたまひ、さまざまな物のさとししきり、騒がしきを、いみじき御つつしみどもをしたまふしるしにや、よろしうおはしましける御目の悩みさへこのごろ重くならせたまひて、もの心ほそくおぼされければ、七月二十余日のほどに、また重ねて京へ帰りたまふべき宣旨くだる。〔明石〕卷・一八三頁―一八四頁）

この記述は、朱雀帝が弘徽殿太后に背いて、光源氏の都への召還を決定した場面である。朱雀帝は、桐壺院の亡霊が出現した直後は「御目にわづらひたまひてたへ難う悩みたまふ」という状態であった。それが、この時点では「内裏に御薬のことありて」という状態にまで至っている。また、朱雀帝の体調の悪化と平行して、精神的にも心細い状態であることが分かる。

作者は、朱雀帝に遺言を実行させる為に、様々な要素を複合して物語を動かしている。その一つには、桐壺院の亡霊に睨まれたことで朱

雀帝が目を患っていること。次には、祖父大臣を死という形で物語から退場させ、弘徽殿太后は病で衰弱させることによって、桐壺院の遺言を実行する妨げとなつて原因を弱めているのである。さらに、光源氏の須磨退居後に都で続いている天変地異が、より一層、朱雀帝に精神的打撃を与えている。朱雀院の桐壺院に対する後ろめたい心情が徐々に極限に達し、精神的にも肉体的にも追い詰められた時点で、光源氏を都に召還することを決定しているのである。桐壺院の遺言、桐壺院の亡霊、祖父大臣の死、弘徽殿太后の衰弱、天変地異、これらと朱雀帝の心情の動きとの相乗効果によって、光源氏は都に召還されることになるのである。

「若紫」巻で予言された光源氏の「違ひ目」を実現する為には、遺言を実行できないように弘徽殿太后と右大臣が後見にいる「朱雀帝」に遺言を託すという設定でなくてはならなかったのである。けれども、既に「桐壺」巻で予言された高麗人の観相<sup>（注9）</sup>をも、この後の物語において実現していく為には、光源氏が再び都に召還されるという展開がどうしてもなくてはならない。その為に、朱雀帝が遺言を実行できる状況を作り出さなくてはならないのである。物語展開の為に、誰に遺言を託していくかという緻密な人選もなされていると考えられる。

太后、御悩み重くおはしますうちに、つひにこの人を消たずなりなむことと心病みおぼしけれど、帝は、院の御遺言を思ひきこえたまひ、ものの報いありぬべくおぼしけるを、なほし立てたまひて、御心地涼しくなむおぼしける。時々おこり悩ませたまひ

し御目もさはやぎたまひぬれど、「濡標」巻・一九六頁）

同じ月の二十余日、御国譲りのことにはかなれば、太后おぼしあわてたり。「かひなきさまながらも、心のどかに御覽ぜらるべきことを思ふなり」とぞ、聞え慰めたまひける。坊には、承香殿の皇子あたまひぬ。世の中改まりて、ひきかへいまめかしき事どもおほかり。源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ。数定まりてくつろぐ所もなかりければ、加はりたまふなりけり。「濡標」巻・一九八頁）

光源氏の帰京後、朱雀帝の様子が描かれている記述である。傍線部の記述から、桐壺院の遺言が、いかに朱雀帝を精神的に拘束していたのがよく分かる。そして、朱雀帝が春宮（後の冷泉帝）に譲位した後、光源氏は内大臣に昇進しているが、帰京後半年でこのような措置が執られるのは異例である<sup>（注10）</sup>。桐壺院の遺言があるからこそ、このような措置を実行することが可能なのである。さらに、桐壺院の遺言は、死後も光源氏を庇護下に置き、朱雀帝から冷泉帝へと新しい政治体制を整えさせ、新たな物語展開を方向付けているのである。その後の物語において、桐壺院の遺言は、光源氏にどのような影響を与え、また、どのように物語構成がなされているのかについては、機会を改めて述べてみたいと思う。

桐壺院の遺言は、光源氏の運命を良い方にも悪い方にも左右する契機となっており、尚かつ、それが主人公の身の上に関わるものだけに、様々な物語展開を導く要となっているのである。つまり、桐壺院に

「遺言」を残させるという物語の構成が、『源氏物語』において必要であり有効であったのである。

## 七 おわりに

『源氏物語』に見られる遺言の中で、桐壺院の遺言は主人公の運命を左右し物語展開の要であるという点において重要なのであるが、実際にも、帝の遺言というものがあつたようである。『源氏物語』の作者が「日本紀の御局」<sup>(注1)</sup>と称されるほど、『日本書紀』<sup>(注2)</sup>に通じていたことは明らかなことである。『日本書紀』の中にも遺言の記述が見られるのである。中でも、『日本書紀』卷二十三の舒明天皇即位前紀は、田村皇子（舒明天皇）と山背大兄（聖德太子の子）のどちらが皇嗣者であるのか、卷二十二にある推古天皇の遺言の真意をめぐって事象が進行している。帝が遺言を残していることは勿論、前の巻と後の巻とが遺言によって関連し進行していること、遺言を託された人物や遺言の中に語られる人物に影響を与えていることは、『源氏物語』の桐壺院の遺言の在り方と類似していると考えられる。ただ、物語と歴史書とは性質が異なるが、物語展開の為に「遺言」がいかに重要であるのかを、作者は『日本書紀』を通して知っていた可能性があることを指摘しておきたい。

また、『小右記』<sup>(注3)</sup>や『貞信公記』<sup>(注4)</sup>を例に挙げると、人は帝に限らず、死に瀕してこの世に何か気掛かりなことや執着といったこと

があれば、遺言を残しているのである。そして、遺言を託された人物は、その遺言を実行しようとしている。遺言を残すという行為は、現実にもなされていたことなのである。そうした実際の行為を、『源氏物語』では物語を組み立てていく道具として駆使し、物語に真実味を持たせながら主人公を動かし、物語を展開させているのである。

尚、『源氏物語』の本文引用は、阿部秋生校注古典叢書『源氏物語』全六卷（昭和五三年四月／平成七年一月、明治書院）に拠った。

注1 「故母御息所は、おのが叔父にものしたまひし按察大納言の御むすめなり。」（『須磨』卷・一四八頁）の明石入道の発言により、桐壺更衣の父は、按察大納言であることが分かる。「桐壺」巻では「大納言」としか記述がないが、人物をより具体的に捉える為に、本稿では「按察大納言」と呼ぶことにしたい。

2 この時点では、まだ讓位していないが「桐壺院」と呼ぶことにする。

3 この時点では、「一の皇子」という記述しかないが、「朱雀帝」と呼ぶことにする。

4 倉田実「桐壺帝と故大納言の遺言―『源氏物語』の発端の構造（『学芸国文学』二二号、昭和六一年三月）、鈴木裕子「桐壺卷小考―大納言の遺言をめぐって―」（『駒沢短大国文』二三号、平成五年三月）管見の範囲であるが、これらは桐壺更衣と明石一族との

関連を論じており、按察大納言の遺言と桐壺院との関連については述べられていない。

5 坂本昇「桐壺院の遺言」(『成城文芸』六九号、昭和四九年四月)

6 『日本古典全書』、『源氏物語新釈』、『日本古典文学大系』、『源氏物語評釈』、『日本古典文学全集』、『新潮日本古典集成』、『新編日本古典文学全集』、『新日本古典文学大系』に拠る。

7 『源氏物語玉の小櫛』(『本居宣長全集』第四卷、大野晋編、昭和四四年一〇月、筑摩書房)の年立を参考にした。

8 注7に同じ

9 「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて天下を輔くる方にて見れば、また、その相違ふべし」と言ふ。(『桐壺』巻・二四頁)

10 光源氏は三年経過しない内に都に召還され、尚かつ、帰京後半年で須磨退居前より高い位に昇進している。

「世のもどき軽々しきやうなるべし。罪に怖じて都を去りし人を、三年だに過ぐさず赦されむことは、世の人もいかに言ひ伝へはべらん」など、后にかく諫めたまふに(『明石』巻・一七七頁)

この弘徽殿大后の発言の記述から読みとれる事であるが、光源氏に対する措置は異例であると言える。

11 『紫式部日記』(『新日本古典文学大系』、平成元年一月、岩波書店)

12 『日本書紀』下巻(『日本古典文学大系』、昭和四〇年七月、岩

波書店)

13 『小石記』(『大日本古記録』、昭和六一年三月、東京大学史料編

纂所)

故相国無遺言云々(永祚元年六月)、院遺詔停奉哀(寛弘八年七月)、至遺言不可被(寛弘八年七月)、識者遺言無相違歟(長和元年六月)、仍不違遺言可奉供養者(長和四年五月)、不可破遺言云々(寛仁三年九月)を遺言の記述の例として挙げておく。

14 『貞信公記』(『大日本古記録』、昭和三二年三月、東京大学史料編纂所)

承平元年八月の記事に「遺詔」が一例見られる。

(やまはた さちこ/平成十三年度博士前期課程修了)

【表1】

蓬生	湊標	賢木					葵	若紫			桐壺	巻名
常陸宮	六条御息所	桐壺院					前坊	紫上の尼君	紫上の祖父	明石入道	桐壺更衣	遺言を残した人物
ナシ	秋好中宮	ナシ	ナシ	冷泉帝	冷泉帝	光源氏	六条御息所	紫上	紫上の母	明石御方	ナシ	遺言に語られる人物
末摘花	光源氏	左大臣	冷泉帝	光源氏	朱雀帝	朱雀帝	桐壺院	光源氏	紫上の祖母尼君	明石御方	桐壺院	遺言を託された人物

総角	椎本	橋姫	御法	夕霧	柏木	若菜上		玉鬘	薄雲	蓬生
大君	八宮	柏木	紫上	一条御息所	柏木	明石入道	朱雀院	少弐	藤壺宮	末摘花の乳母
中君	大君・中君	大君・中君	薫	ナシ	ナシ	落葉宮	光源氏	玉鬘	冷泉帝	末摘花
薫	大君・中君	薫	弁君	光源氏	匂宮	夕霧	夕霧	明石御方・明石御方の母	光源氏	末摘花・侍従